

寺田縄日枝神社神輿 神輿（3） 神輿の完成と村民への披露（2021. 6）

<1> 神輿の完成

白木で購入した神輿は、明王太郎景元の手によってすっかり造り替えられ、翌、慶応三年（1867）四月三日の祭礼日に完成しました。

完成の祝いは、寺田縄の山王社で神輿の披露と村内への渡御が行われました。

日枝神社神輿に納められている慶応三年（1867）四月の棟札があります。



<裏>



<表>

慶応三年四月の日枝神社神輿の棟札

天下泰平 日月清明

慶応三丁卯歲  
孟夏祭禮日

奉請鎮守山王大權現山門繁昌當村惣氏子中各々安全折攸

風調雨潤 五穀豐饒

寺田編村  
別當 東善寺

表

予窃以物換時移是世之風光而殆離船矣都鄙  
是一様而諸般美花之儷節也狀即所以世之隆  
盛而專行花美也是以當村氏子者皆崇鎮神從  
去歲以下欲作新興一統拳以悉評之無止日志  
月考賴於大山之工匠故數登語之匠即受之依  
使幾數日以成之此年丁卯孟夏上祥日竣哉一  
統仰捧天以備真前云爾

兩歲推心逐此神 高興幾許盡金銀  
大山工匠顯名術 拮据無窮門外新  
現住 十五世哲成叟敬記之  
工匠 大山手中明王太郎作之

石塚權兵衛	石塚重太郎
足立吉三郎	吉河長五郎
石塚源太郎	石塚忠太郎
役 吉河年番長平	石塚鉄五郎
組頭	小泉鉄五郎
二之宮勝三郎	高橋芳太郎
人 石塚惣右衛門	小泉政三郎
小泉多左衛門	二之宮丑五郎
中 井手傳吉	二之宮由五郎
二之宮弥市	
二之宮右衛門	
小泉次助	

裏

□ 棟札の裏書を現代文に訳すと、次のようになります

物事は変化し、時が移ろうことは、世の習わしであると思ふ  
町や田舎であっても移り変わることは同じである。  
何事もその変化に流されることなく、節度を守り生きることが大切である。あたかも花のように美しく生きる。こうすることが世間を隆盛に導く。花は美しく咲かねばならない。

寺田縄村の氏子たちは、皆がこの考えで神を敬い、深い信仰の心をもって、昨年、新しい神輿を作りたいと考え、皆、心を合わせ、熟慮を重ね、大山の工匠（明王太郎景元）に幾度かお願いいたしたところ、時をおかず、受けてもらった。

そののち、神輿は完成し、慶応三年丁卯の年 四月上旬の日に幕を張り、氏子全員が心をこめて天に感謝し、新造の神輿を奉納することとなった。

二年の歳月をかけ、心をくだき、資金を尽くして、  
大山の名工匠に作ってもらったことを皆で喜んだ。

現住職 十五世哲成叟敬 これを記す  
工 匠 大手中明王太郎 これを作る

中 人 役	組 頭	若 者 頭
石塚権兵衛	二之宮勝三郎	石塚重太郎
足立吉三郎	石塚惣右衛門	吉河長五郎
石塚源太郎	小泉多左衛門	石塚忠太郎
吉河年番長平	井出傳吉	小泉鉄五郎
	二之宮弥一	高橋芳太郎
	二之宮治右衛門	小泉政三郎
	小泉治助	二之宮丑五郎
		二之宮由五郎

棟札からは、寺田縄の村民を挙げ、山王社（日枝神社）の神輿を作り上げ、大事業を成し遂げた喜びがはじけます。

新編相模国風土記稿によると、当時の寺田縄村の戸数は五十三戸でした。領主は、白須氏と近藤氏の二給地で、産業は、稲作がほとんどでわずかに畑作が営まれていました。白須氏418石、近藤氏653石、合わせて1071石の領地でした。

棟札にある19戸の家々が中心になり、寺田縄日枝神社の神輿が新調されました。

## ＜2＞ その後の修理

前掲の「手中 正 神輿と明王太郎 東京美術」には、その後の修理について残存する棟札が紹介されています。しかし、現在、神社内には棟札が見当たりません。前掲書からその後の2回にわたる修理を紹介いたします。

■ 明治二十八年（1895）四月二十日、明王太郎景元によって再び修理の手が入りました。次の棟札が残されています。



表書は、「再造奉る 日枝神社神輿」となっています。見習には、手中五郎景時が当たりました。

裏書には、神輿の世話人として6人の名が記されています。修理の経費は分かりません。

大住郡金田村寺田繩

御神輿世話人

小泉弥太郎、 井出口太郎、 石塚銀二郎

石川信次郎、 二宮久助、 吉川鈍五郎

■ 昭和四年（1929）十月十日にも修理が行われ、棟札には東京の塗師 若松屋長治、大工 二宮壽、弟子二宮海蔵、鉄葉職（\*） 松本嘉之助の銘文と、神輿世話人として吉川令夫、石塚英三等八名の名前が記されています。塗り師の名がありますので漆の塗りなど神輿の表面の塗装修理がなされたと思います。また、大工により全体の補修、飾り金具の修理もなされたようです。

\* 鉄葉職：金属の細工職人

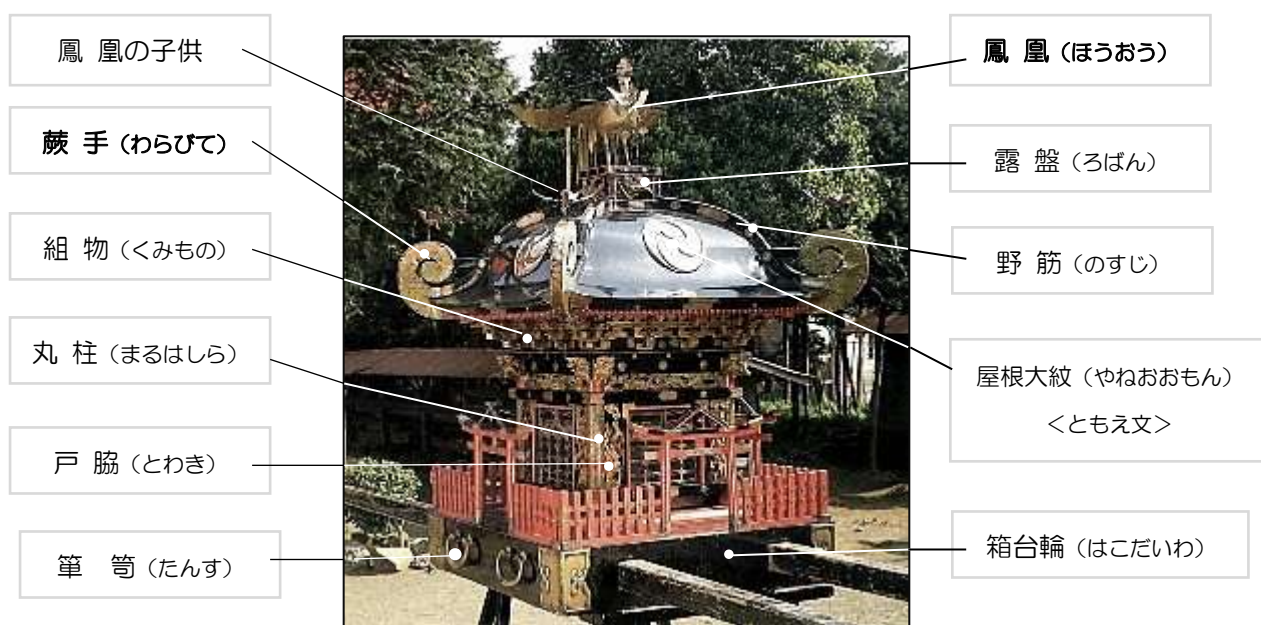
三之宮比々多神社の神輿を譲り受けた、寺田繩の村民は、日枝神社の例大祭に伝統を継承し、高名な宮大工手中明王太郎景元の手になる、自慢の神輿を担ぎ村内を渡御してきました。それは、長年にわたり、代々村民の間に受け継がれてきました。前述のように、何度かの補修も重ねられ、そのたびに村民の意思が纏められ、日枝神社の例大祭に担がれ続けてきました。

その後どのような修理がなされたかは、資料がなく分かりません。

■ 第二次世界大戦後、『日枝神社の例大祭の祭典に昭和53年（1978）から太鼓連が加わり、56年（1981）には神輿渡御が行われ』（山王会小史 平成22年）盛大な例大祭が挙行されてきました。

■ 東海道新幹線の寺田縄地区工事期間中は、無用なトラブルを避けるために、例大祭の規模を縮小し、社殿での式典のみとされました。

### <3> 日枝神社旧神輿と各部の名称



頭貫木鼻 (かしらぬききばな) 獅子の彫刻



(写真 手中 正 前掲書より)

#### ＜4＞ 日枝神社の神輿の特徴

日枝神社の神輿は、『屋根の長さを柱間寸法で割った値は1.88で、他の神輿がすべて2.2以上で平均が2.35という中で極端に小さい数値である。また総高を柱間寸法で割った値も平均が2.2に対して2.07で、最も小さい。このように、平塚の神輿の中では異色のプロポーションをもつのがこの神輿の大きな特徴である。・・・全体に簡素で、よく古式をとどめている。』（平塚市文化財調査報告書 第34集）と、その特徴が示されています。

#### ＜5＞ 手作り神輿の製作・完成

昭和57年（1982）3月、神輿は、これまで担ぎ込まれ、いたるところに損傷も見られ、点検の結果、担ぎ続けることは難しいと判断され、5月、『旧神輿の修理を専門家に依頼することは困難と判明し、手作りで新しい神輿を製作しよう・・・』（山王会小史 平成22年）となりました。慶応三年（1867）手中明王太郎景元の手になる御輿が完成し披露され、寺田縄の村民に愛され、担がれてきてから、115年の年月が経過していました。

『毎月第一、第三日曜日を製作日に当て、材料の樺は太鼓連（現山王会）の会員より調達、また、旧神輿の写真を撮り、原寸大に拡大して図面代わりとした。会員の中に大工は本職、また彫刻、塗料はセミプロの方々のチャレンジで、それぞれ分担をして製作への挑戦が開始された。神輿の製作は初めてであり、榊組の材料の寸法を間違えて作り直したり、塗料が濃すぎたためシワが出てしまったり塗りなおしたり、何度も壁に突き当たることが多くあった。』（山王会小史 平成22年）と、製作過程の苦勞がしのべられます。

寺田縄日枝神社の歴史（平成九年）に、『総括は会長の石塚博、「＜大工＞小泉喜太郎  
＜彫刻＞二宮 孝、飯塚富雄 <彫金＞山岸信昌、二宮 章、中島和久  
＜塗装＞高橋好一 <写真＞船木 達、<全般手伝＞太鼓連一同』と、神輿造りの中心になった人々が紹介されています。もちろん作業はすべてボランティアでおこなわれました。

昭和62年（1987）3月、神輿は6ヶ年の歳月を費やし完成の運びとなりました。4月、新神輿の奉納、お披露目そして念願の町内渡御。寺田縄の日枝神社神輿は新しい時代を迎えました。

新神輿の完成と共に、それまで総ブリキ製の古い手作りの子供神輿は、本格的な子供神輿として、新たに手作りで造られ、制作にあった小泉氏より寄贈されました。この小型の子供神輿は大人神輿と共に日枝神社に奉納されました。

奉納された新神輿は、神奈川県立高浜高校の生徒による三番叟の舞によって祝われ、花柳勝太郎一座の芝居も花を添えました。

寺田縄村の人たちに、長い間親しまれ担がれてきた、旧の神輿は寺田縄の歴史と共に社宝として永久に保存することに決定し、現在は社殿の中、厳かに安置され、新神輿の行く末と、寺田縄に住まう人々を見守っています。